

38年、39年度の年齢組成について

各年度の全体の個体数を100%とし、各年級別に分けると、次表の如くなる。

年令 \ 年 度	38 年 度	39 年 度
2才	0.9%	0.3%
3才	0.6	27.0
4才	25.0	8.1
5才	33.4	36.0
6才	15.3	19.5
7才	4.2	7.8
8才	3.6	0.3
9才	3.6	0.9
10才	4.2	
11才	4.2	
12才以上	4.8	

38年度のサンプリング方法に若干疑点があり、また2年間の調査で結論づけるのは危険であるが、次の事が想像できる。

- (1) 39年度は38年に比べ一般的に魚体が小さかつたのは3才魚が増えた為と思われる。
- (2) 2才魚以下は漁獲の対象になりえないようである。
- (3) 漁獲の主対象となるのは3～6才魚特に4～5才魚と思われる。
- (4) 38年の3才、即ち39年の4才は少ないが、この年級群は発生が少なかったものと考えられる。

8. 1964年度おしよろ丸北洋サケマス漁場調査 (概 要)

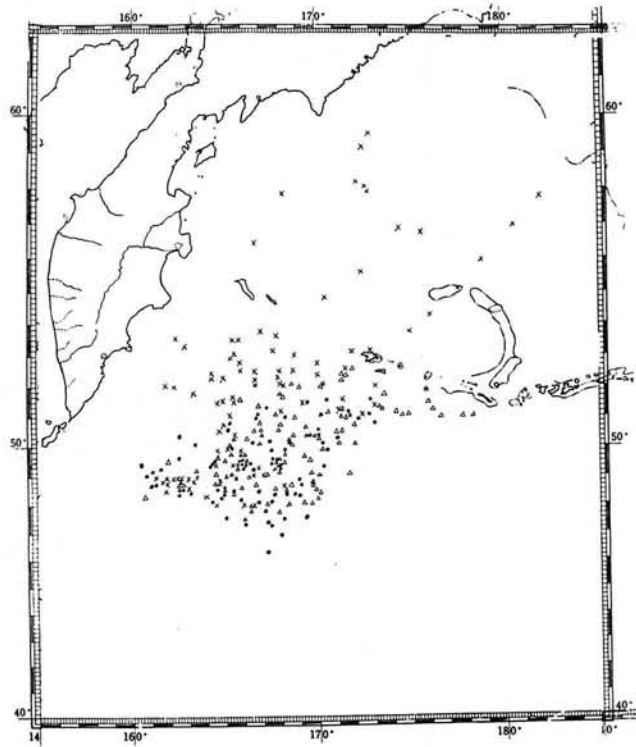
藤 井 武 治 (北海道大学水産学部)

1) 初漁期におけるAttu 島南西海域の海況と漁況

毎年サケマス母船の5、6月の初漁期における漁場は大凡 $48^{\circ} \sim 50^{\circ} \text{N}$, $165^{\circ} \sim 170^{\circ} \text{E}$ の緯経度線に包まれる海域に形成されている。この海域はAleutian列島南側を西進するAlaskan Streamの西端とWestern Subarctic Gyreの接触する海域であり、サケマス漁場がこれ等2水系の接触面に形成される所謂潮目漁場である

ということが出来る。

オ1図は6月上・中・下旬の母船操業位置図で上中旬は大凡前記海域に集中して操業していた。オ2図はおしよ丸の6月6日から17日迄、および北光丸の5月下旬から6月中旬の観測による中冷水温図である。これによれば母船の操業位置は中冷水温 $2.5^{\circ} \sim 4^{\circ}$ 内で特に 3° 前後の水温帯に集中しており、Alaskan Stream と Western Subarctic Gyre の接触部に漁場が形成されていたものであろう。その後漁場は次々に西亦は北西に移動するが、このことについては既に多くの研究報告があり省略するが、カムチャツカ系シロ、ベニの移動を指示するものであり、初漁期の漁場は Alaskan Stream の西方への張り出した形状が位置を決定するものと思われ。



オ1図 6月上、中及び下旬母船操業位置図。

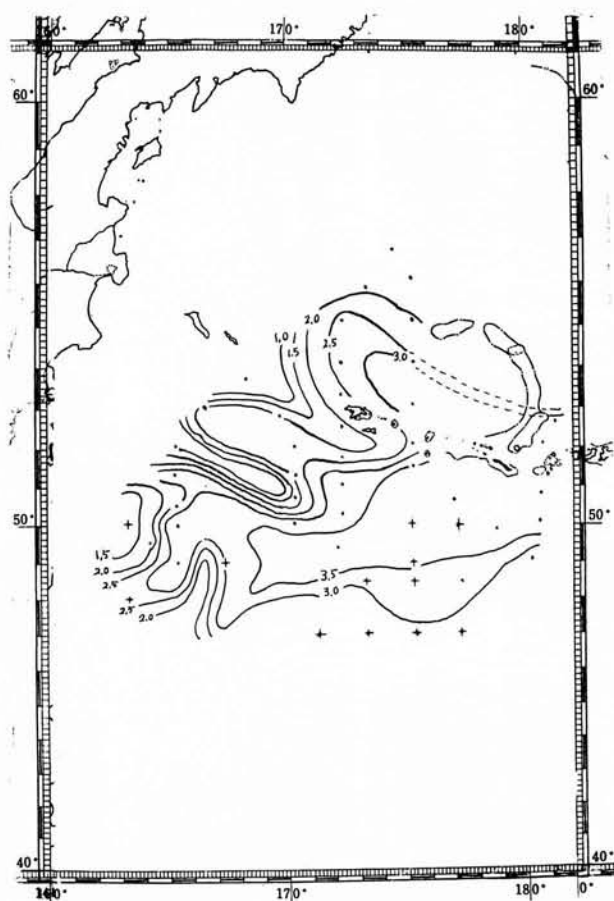
○—上旬、△—中旬、×—下旬。

2) ブリストル系ベニザケ

例年6月中下旬頃にはカムチャツカ系ベニの東方にブリストル系ベニが出現し、母船漁場が2分して、一部の母船は Aleutian 列島南を東部から Bering 海に漁場を求めますが、本年は東行船団は好漁場が捕捉出来なかつたか、移動も甚しく安定していなかつた。

オ3図はおしよ丸による6月17日から7月19日迄の中冷水温図である。

6月中・下旬におけるブリストル系ベニは Aleutian 列島の水道から Bering 海に入り、その後東進するものであるが、速く Attu 島附近から迂回東進するものもある。これ等ブリストル系ベニは Pribilof 諸島南側から西側に続く陸棚200m線附近に一時滞留するようみられるが、後述する陸棚上の海況が影響するものと考えられる。この



オ2図 5月下旬～6月中旬 Attu 島南西海域中冷水温図。

○おしよろ丸 +北光丸。

年の主群は余り北に寄らず寧ろ Alaska 半島先端に近い水道（少くも Amukta 水道以東）から流入したのではないと思われる。一般に高年魚は東経域を迂回し、若年魚は西経域から Bering 海に入つて Bristol 湾に回泳するといわれている。

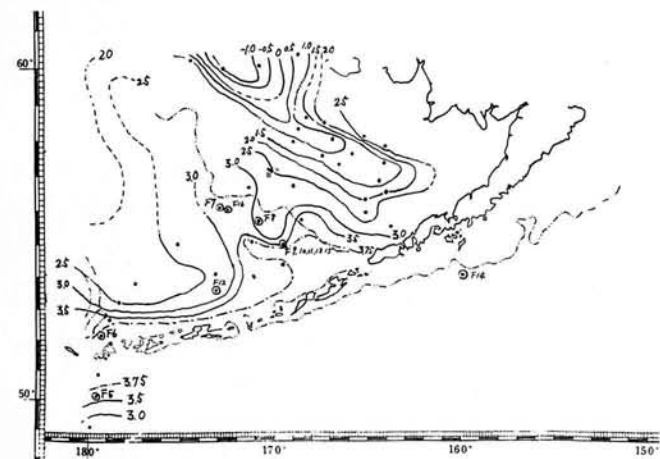
おしよろが Pribilof 諸島南方域の同一地点（F 9, 10, 11）でベニの濃群を8日間捕捉したが、そのベニ群は F. L. 5.4 cm を主群とする 4.2 年魚が主であつた。

3) Bering 海北東海域

従来 Bristol 系ベニの調査時期に Alaska 寄り陸棚 200 m 線附近を北上するシロザケ群のあることを認めていたが、今迄そのシロの追求をすることがなかつた。

7月下旬から8月上旬に Bering 海北東部を Bering 海峡迄調査を行なつたのでこの概況を報告する。

Bering 海北部には7月中旬以降に小型ベニシロの出現が知られているが、Alaska 半島先端から北西 Navarin 岬に至る東側は広大な陸棚である。この海域は冬期結氷し、夏期表面水温は9℃前後に上昇する。

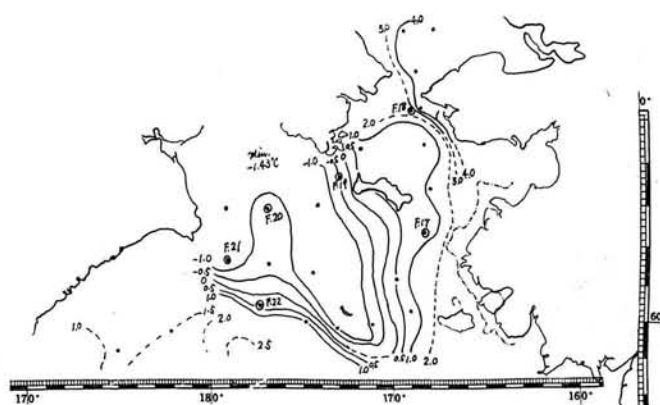


オ3図 6月中旬より7月中旬の Bering 東部海域の中冷水温図 F。一流網試験番号。

沿岸に北上する暖水と、陸棚200m線に沿つて北西進する暖水があり、その中間に冬期の寒冷水が南東方に延びて残っている。その中心域は St. Lawrence 島南部から Siberia Anadyrski 湾沖合で、この附近の海底附近の水温は0℃以下(最低-1.49℃)であり、亦低カン水(33%以下)である。従来 Olyutorski 地区にはベニ、シロの漁獲が知られており、亦沖合には索餌群のシロ、ベニの回遊も知られていた。

オ4図は Bering 海北東部の7月下旬、8月上旬の海底附近の水温図である。

7月28日 Uukon 河沖合(F17)では F. L. 56~63cm を主群とする大型シロが漁獲され、生殖巣も成熟肥大し、体色も灰色をおび、おそらく間近に附近の河川に溯上するものと思われる3、



オ4図 7月下旬及び8月上旬 Bering 海北東海域海底水温図、F 一流網試験点番号。

4年魚であり、全漁獲の89%を占めた。(その他の漁獲ベニ2、マス9、オシヨロコマ11)

7月31日 Bering 海峡南口(F18)ではF.L. 60cm以上のベニ16尾、シロ9尾が漁獲され、マスは皆無であつた。

8月1日から5日迄、Anadyrski 湾沖合(F19~22)で試験操業を行なつた。この海域には端脚類(Amphipoda)を飽食しているシロが相当の濃密度で分布しており、北側(F19)にF.L. 52~60cmを主群とする4年魚、南側(F21、22)にF.L. 45~50cmを主群とする3年魚があり、その中間(F20)では両者が混合して分布していた。亦ベニはF.L. 46~52cmを主群とする小型群で、Navarin 岬附近に分布し、何れも索餌回游群と考えられるが、将来尙一層研究の余地を残している。

注：本試験操業に使用した流網はアミラン製薄墨色で115、121、130、136mmの網目計120反を使用した。

参 照 文 献

- | | |
|---------|--|
| 田 口 喜三郎 | 北洋の鮭鱒漁業とその資源 北洋資源研究協議会
(1956) |
| 水 産 庁 | 1955年北太平洋サケマス調査中間報告
(1956) |
| 松 下 友 成 | 北太平洋、ベーリング海におけるサケ、マス地方別魚群の分布と回遊
北洋資源研究協議会
(1963) |